読書療法の可能性

――老人保健施設での試みから――

高橋久子

〈問題の所在〉

・ひとつの出会い

今年の春、祖母の入院をきっかけに、医療機関の中での老人の存在を強く意識するようになった。

特に、見学に訪れた老人保健施設にて、きびきびと働かれる職員と近代的設備の中にあって、無表情、無感動に見える、入所老人たちの様子が非常に気になった。

陽あたりのよいデイルームに車椅子で集合した老人達が、部屋の中央に、でんと据え付けられた大型テレビを囲んで、長い時間ぼんやりと、笑うでもなく、隣りと語るでもなく、ただ、そこに居る。自室に居る時は、大半、ベッドの上で、「ごはんですよ」「おやつです」「おしっこは大丈夫ですか」といった、外側からの指示を待っている。彼らが、こうした、一方的な刺激や、外部からの指示とは別なところで、自分本来の時間をとり戻すことができたら、少しずつ、表情も変わってくるのではないか、と考えた。

このような思いで見学を重ねた施設であるが、月に一度行なわれる〝お楽しみ会〟の中で、大型紙芝居に引き寄せられる老人たちの表情に、一つの手がかりを見い出したような気がした。この後、紙芝居と絵本の性質の違い、効果の違い等を検討していかなくてはならないのであるが、まず第一段階として、〝ものがたりの時間〟が老人達から引き出していくものがあるのではないかという仮説のもとに、絵本を用いた読書療法を、この老人保健施設で行なうことにした。

尚、あらかじめ断っておきたいことは、調査に協力してもらうことになった老人保健施設が、国内ではかなり高水準の設備を有し、一日に一回、介護スタッフの立案で行なわれる、ゲームや歌などのリクレーションタイム、その他、入浴、散髪、美容等のサービスを見ても、外部環境としてのケアは、かなり充実していると判断できるということだ。そして、それでもなおかつ、老人たちひとりひとりの喜びや生きがいをみつけ出して支える、心理ケアの必要性が大きい、ということを問題にしたいと思う。

・読書療法の概要とこれまでの経過

筆者は、一九八三年～八四年にかけて、東京都内の大学病院、小児病棟で、小児看護の問題にとり組んだ。その際、入院中の子

どもの心理的ケアの一つとして、子どもたちとともに絵本を読みあうことにより、子どもの内側にある問題をひき出し、新たに問題解決の糸口をみいだそうとする〝読書療法〟（bibliotherapy）の可能性を考えてきた。

入院児に、週二回、一回二冊ずつ、長期間にわたって読みきかせを実施し、子どもの変化をみていった結果、子どもたちは、回を重ね、たくさんの絵本と出会ううちに次のような三つのプロセスを経て、心理的緊張を緩和していくことが明らかになった。[1]

a．情動解発…対象者の内面にうっ積している欲求不満や心理的葛藤を、作品内の人物の思考・感情・行動等に対する感想として表出。これにより、衝動的情緒や消極的感情を発散させるメカニズム。

b．同一視…対象者の過去の人間関係のなかで形成された感情を作品内の人物に投影する〝感情転移〟を経て、新たな両親像や自我像を理想像として摂取するメカニズム。

c．創造的洞察…表面的な知的認識から情動解発をともなった感情的洞察を経て、人格変化を生じさせるようなメカニズム。

また、こうしたプロセスを経た子どもたちの様子をビデオに収録し、毎回母親に観てもらったところ、口答での経過報告のみの母親グループに比べて、ある程度のストレス軽減が、母親にもみられた。[2]

さらに、小児病棟から場面を一般家庭に移し、親と子が、絵本を読みあう中で、日常ほとんど無意識につくり出している〝家庭として〟あるいは〝親子として〟の関係がどのように気づかれ、変化していくかを、事例にそって探ってみた。[3]その結果、読みきかせを続けるうちに、親が〈親〉としての役割を脱ぎ、一人の〈わたし〉として作品の中にゆったりと心を遊ばせることができるようになった時、新しい展開が生まれることがわかった。一方、子どもは自らの傍らに、自分と同じように一つの作品を愛し、変わろうとするかけがえのない存在として親を認めることができた時、自身も変わるきっかけをつかんだことがわかった。

・子どもから老人へ（絵本の可能性を考える）

これまで、子どもと絵本、或いは、絵本を介した親と子の関係とその変化の過程をみてきたが、今回は、老人と絵本の中のものがたりが、どのように出会い、からみあうか、ということと、老人の傍らで絵本を読む私自身がどのように変化していくか、という視点から、従来の読書療法の適用可能性を考え直してみたい。

尚、この後、個人をひとくくりにする〝老人〟ということばの用い方に、できるだけ慎重でありたいと思う。

〈調査の概要〉

・調査施設　老人保健施設丁園

（一九九四年開園、入所者数七〇人、
ベッド数八〇床、
作業療法士二名、
介護士二〇名、
看護婦八名）

・調査期間　一九九五年七月～八月

（七月は観察期間。八月は、週二～三回のペースで、一人ずつ、ベッドサイドでの読みきかせ。計十回施行。調査終了後も、読みきかせの関係は、継続。）

・調査対象者　以下四名（J園入所者）＋一名（自宅介護者）計五名

a．Y・M（♀）　M31・11・13生　九十六才（一九九五・九・一現在）

高血圧、白内障、骨粗鬆症

平成七年一月二十日入所

（入所時の記録から）

性格は穏やか。趣味は謡曲

ほとんど家の中で過ごす

入所理由は、介護者が病弱なため

入浴・着脱・歩行、いずれも半介助

排泄自力（パット使用）

（調査開始時の所見）

このところ体力の衰弱著しく、一日の大半をベッドでうつらうつらと過ごす。ことばは理解できるが、やや気力に欠ける。

時々排泄ミスがあり、本人も気にされている様子

倦怠感の訴えあり

b．K・T（♀）　M34・9・17生　九十三才

右大腿骨頚部外側骨折術後

難聴

平成六年十一月四日入所

（入所時の記録から）

性格は、頑固、我儘（家族より聴収）

趣味は庭・畑の土いじり

入浴・着脱・歩行はいずれも半介助

睡眠不振あり・運動障害左半身あり

入所時まで、特浴以外入浴なし。入所後一般浴軽介助にて入浴可能となる

入所理由は、家族の負担が大きいためと、本人の自立目的のため

（調査開始時の所見）

自己の健康管理に熱心。大きな声で話せば意思の疎通は比較的楽。警戒心やや強く、周囲とのコミュニケーションは難しい。

c．K・K（♂）　T12・7・3生　七十二才

脳梗塞後、軽度痴呆兼左マヒ

平成六年八月三十日入所

（入所時の記録から）

性格は、神経質で、他患者との交わり少ない

趣味は盆栽、魚つり、入所前まで入院生活四ヶ月間

入浴・着脱・歩行いずれも全介助

左半身麻痺あり、弱視、軽度痴呆

排泄介助要、左半盲と共同偏視のため、右手前にあるものしか見えない

意欲低下あり、簡単な会話のみ可能

入所理由は、機能維持とリハビリの為
（調査開始時の所見）
意欲低下が進んでいる様子。意志の疎通はかなり困難。介助者なしでは座位起きあがり困難なため、日中大半の時間をベッドの上で過ごされる。或いは車椅子にて、デイルームの大型テレビの前で、じっとしておられる。

d.
F・Y（♀）　T2・5・1生　八十一才
脳出血、右半身麻痺、失語症
高血圧、放射線照射代皮フ潰瘍
平成七年一月二十日入所
（入所時の記録から）
性格は、温厚、短気、依頼心が強い（家族より聴収）
趣味は手芸
入浴、着脱、歩行、いずれも全介助（入浴は、車椅子にて特浴）
排泄要介助
言語障害、運動障害あり
入所理由は、家庭の都合で充分な介護ができないことと、リハビリの為
（調査開始時の所見）
内向的で、ほとんど、他者との接触なし。
言語障害のためか、スタッフとのコミュニケーションが困難な様子。表情がうつろである

e.
F・T（♀）　T14・5・4生　七十才
腎不全、人工透析治療
平成七年八月退院、自宅療養と通院
（これまでの経過）
夫と死別後、ひとり暮らしを続ける。
二度の入退院の後、平成七年七月より人工透析を開始。経過は良好で、八月末退院となり、その後は週三回、通院による透析治療に切り替わる。
趣味は、書道、裁縫、料理、畑仕事
性格は穏やかで、沈着冷静。しかし、透析治療の開始で、生活様式が大きく変わり、とまどいと不安あり。
（調査開始時の所見）
全体に治療の疲れか、倦怠感あり。意思力で、ひとりずまいの不安と病気に対する不安を、何とか克服しようとしている様子がうかがえる。

・調査方法
読みきかせ実施前に、各自の生きがい尺度（PGCモラールスケール）評点を確認した。F・Tさんについては、調査開始時に実施したが、他四名の、J園入所者については、事前のデーターがあったので、これを確認した。
※生きがい尺度…ホーム入所老人の生きがいについて調べるためにアメリカで開発された、二十二項目の質問文。これによって得られたモラール得点が高いほど、その老人は生活に意欲的で生きがいを感じているとみなされる。ホーム及び老人福祉セン

ター利用老人の平均得点は、日本ではおよそ14点前後とされている。

今回の調査対象者のモラール得点は、以下のとおりであった。Y・M…15／22、K・T…15／22、K・K…9／22、F・Y…検査不能、F・T…8／22

さて、従来、筆者が行なってきた読書療法の調査では、その効果を確かめるために、調査開始前と調査終了時に、PFスタディ及び診断的親子関係検査という二種の心理テストを実施し、その変化に注目した。また、読みきかせ中の記録として、動作反応、言語反応に分けたチェックリスト・シートを用い、絵本一冊ごとに場面展開にそって、子ども及び母親の反応を記録していった。

しかし、今回の調査の場合、難聴や、半身麻痺、痴呆や言語障害を持った人に、再度にわたる（しかも質問文もアメリカ的で、日本の状況の中では、問い正すことも答えることも憂慮すべき点が多い）テストは、はばかられた。また、読みきかせ中の記録の仕方も、ひとりずつの反応が非常に微妙で、動作反応、言語反応という風に明確に分けてチェックすることが困難に思われた。そこで、今回は、筆者の主観が混じる危険性を覚悟の上であえて、一般記述にとどめていくことにした。最終的には、言語反応・動作反応といった形式的な反応分類をこえた、本と読み手のかかわりの深さをまるごと捉えうるような尺度をみつけたいと考えているが、今回はその前段階とする。

・読みきかせプログラム

一ヶ月間に読みきかせを行なった絵本のプログラムは表1のとおり。

ひとりずつのその日の体調等を、毎回看護記録等で確認し、特に体調の優れない日は、面接のみ、あるいは面接もとりやめることにした。

表1 読みきかせ実施プログラム

面接／同		Y・M	K・T	K・K	F・Y	F・T
1	石のししのものがたり チベット民話	○	○	○	○	○
2	かにむかし	面接のみ	○		○	○
	えぞまつ			○		
3	絵本なし。面接のみ	面接のみ	面接のみ	面接のみ	面接のみ	面接のみ
4	白い鳥	外泊	○		○	○
	山のいのち			○		
5	花さき山	途中で中止	外泊	○	○	○
6	ねずみのすもう	○	○	○	○	○
7	おだんごころころ	○	○	○	○	○
8	こんこんさまにさしあげそうろう		○		○	○
	ぽとんぽとんはなんのおと	○		○	○	
9	ちさとじいたん	○	○	○	リクエスト	○
10	月の姫	○		○	○	○
	うさぎのみみはなぜながい		○		○	○

〈結果〉

・各回ごとの読みの記録

①Y・Mさんについて

第一回『石のししのものがたり』

看護婦さんから絵本の読みきかせの事を事前にきいておられ、楽しみにされる。九十六才という高齢のせいもあり、動作も息をする早さも、ことばを受けとめて、自分のことばを返す速度も、とてもゆっくりされている。自然に、私の本を読む速度も、それにあわせてゆっくりになっていく。母親と弟が家を出て行くシーンから、胸の波打ち方と、本を読む声のめりはりがうまくあってくる。からだ（上半身）で、ものがたりのリズムを受けとるようなきき方をされた。絵本を読み終わると、「私は歳をあなたよりとっているぶんだけ、なにかできるでしょうかねえ」と言われた。ごうつくばりの兄が、ししに噛まれたシーンも「おうおう、まあ」と、おだやかにながめられていたのが印象的。因果応報的にストーリーを解釈するのでなく、登場人物と、そのまわりの風景を、遠目にながめているという感じ。

第二回　血圧が高いということで面接のみ。手がこの頃ふるえる、ということや、横になっている時間が多くなったことを話される。「苦しい」と訴えられる。

第三回　面接のみ

微熱もあり、しゃべることがおつらそうなので、短い声かけのみにする。

「申し訳ない」と頭を下げられる。

第四回　外泊

お盆ということで、ご家族の方のお迎えで自宅に戻られる。

第五回　なし

自宅から戻られた直後で、数回様子を見に伺うが、疲れのためか睡眠中。面接を断念

第六回　『ねずみのすもう』

久しぶりに体調が戻られ、うれしそうに絵本にききいられる。読みの途中で何度か手をのばされ、絵の〝やせねずみ〟をなでられる。本を閉じると、もう一度ご自分が横になったまま片手でページをめくられねずみをなでられる。「おもしろい話じゃったねえ」とおっしゃったあと、「もったいないことです」と手をあわせられる。本にききいっている時の安らいだ表情と、読み終わった時の表情が異なる。読み終わった時の、ほおっというため息で、現実世界にひき戻られるのかもしれない。「（本は）いいですねえ」とつぶやかれる。

第七回　『おだんごころころ』

静かに目を細めてきいておられた。

となりのじいさまが、穴の中に入りこんで、じぞうさまのまえへ行ったシーン

――「ほっ、いしのじぞうさまが　だんごくいなさるはずがねえ。」って、どろの　ところを　おくちへ　ぬりつけ、　いい　ところは　じぶんで　べろっと　たべてしまったんだと。――のところを読むと、目を見開いて、息をのみこまれるのがわかった。続くシーン

――それから　となりの　じいさまは、じぞうさまが「じじいよ　ひざに　のれ」ともいわれないうちに、ひざから　かたへ、かたから　あたまへ　がしゃがしゃと　のぼったんだと。――

を読む時は、もう、おじぞうさまに対して申し訳なくて仕方がないという、哀しそうな表情をされ、読み手の私自身、胸が痛くなる経験をした。

昔話の典型的な人物造型である〈主人公の人のよい爺対隣りの意地悪爺〉という描写に出会っても、Y・Mさんにとっては、その隣りの爺さんの業を積む行為そのものに哀しみを抱くのだということを知る。この隣りの爺さんに対して勧善懲悪的なこらしめの目を向けたりすることはない。その証拠に、一番最後の場面で、ストーリーが急展開し、

――さあ、おにどもに　とっつかまった　じいさまは　どうなったものかねえ。　どっとばらい。――

を読みあげると、不思議そうに首をかしげておられた。このラストは、単に、読者に物語の行方を預けるということでなく、そこまで、物語に耳を傾け、ついてきた読者が、突然読みのリズムをこわされ、肩すかしにあった感じがある。そして、Y・Mさんにとっては、自分の中で、この物語のラストの折り合いをどうつけていいかわからない、途方にくれた感じが、最後の表情に現れていたようだ。本を読み終わったあと、表紙の主人公のおじいさんの顔をなでなで「ええ顔じゃねえ」とつぶやかれる。「なんとなく、おばあちゃんに似とられますねえ」というと、「ほうですかねえ」とほほえまれる。

第八回　『ぽとんぽとんはなんのおと』

身体がだるいという訴えと微熱があったが、御本人が希望されたので、眼を閉じて横になったまま、きいてもらう。私自身は、いつもどおりの絵本を読むかたちで、ページを拡げてみせながら、読む。きき手がその絵をみているかみていないかにかかわらず、絵とことばがからみあってひろがっていく詩情豊かな世界に、読み手としても、癒される部分が大きいため、絵本を拡げて読みつづけることに何ら異和感なし。読み終わるとY・Mさんは、ごく自然に目をあけられ、「ええ話でした。ありがたいです」といわれた。

第九回　『ちさとじいたん』

詩のアンソロジー。中でも、ままごとあそびを題材とした「ごちゅうもん」が気に入られ、

――うどんは　ぱんつののびたごむひもです　よくかんで　たべたあとに　あさがおのじゅーすが　でてきました――

のところで、「ホッ、ホッ、ホ」と笑い声をあげる。続く、「つきよ」の詩の

――へええ　じいたんの　おかあさんは　おつきさんなの？――

へええ　ちさちゃんの　おつきさんは　おかあさんなの？――

のやりとりにも、「まあ、ねえ、」と目を細める。「はなつみごっこ」の詩に「きれいな、美しい話ですねえ」とゆっくりことばを出された。しばらく次の詩に移らず、二人で絵をながめる。

第十回　『月の姫』

『竹取物語』を素材としたもの。十四場面での盛り上がり、

――「おまちなさい　つかいのものたち
月の衣を　まとえば　人の心を　うしないます。その衣をきる
まえに　竹とりの　父と　母に　むすめの心で　おわかれした
いのです。」――
を、くいいるようにみつめておられ、次のページをめくる私の
指をも追っておられたが、実際の次ページの展開
――月の衣は　ひるがえり　天空のかなたへ　きえてゆきました――
に、とまどった表情がみられた。この二つの場面の間にあるも
のを、どこで読み手が味わい内側であたためられるかは、この
絵本に関していえば、そのタイミングをつかむのがかなりむず
かしいように思われた。
しかし、その問題点は確かにあるとしてもなお、作者が渾身の
力を八年にわたって注いだというこの作品の力強さと美しさ
に、大いに心を動かされたご様子。私から絵本をとられて、く
り返しページをめくられる。「なつかしいですねえ」とつぶや
かれる。

十回を顧りみて

十回全て絵本を読むことが、体調も悪くかなわなかったが、非
常に快地よい時間を過ごしておられることが、読みきかせ中の
静かな呼吸の中で感じられた。呼吸をされる時の、ふうーっ、
という、大きな息づかいが、絵本を読んでいるあいだは、確か
に静かになられる。読み終わってもしばらく余韻を楽しんでお
られた。

②K・Tさんについて

第一回　『石のししのものがたり』

最初、絵本を読んでもらうと、その絵本を買わなくてはいけな
いのではないかと心配しておられたが、事情を説明すると、安
心される。読み始めると、「これはこどもの本かな？大人の本
かな？」と、くり返しきかれる。第六場面で、弟が石のしし
前でお祈りをするのをみて、「ははあ、これは、仏教のはなしじゃ
な」と、うなずかれる。十三場面で、兄が、石のししの口に手
をはさまれ、何日もその場から離れられない様子をみて、「わ
たしもこん人も、カゴの鳥じゃあねえ」と、ひとりごとをいわ
れる。
絵本終了後、彼女が信仰している浄土真宗のはなしで盛りあが
る。四国の生まれで、信心深い家に育ったことを話される。耳
が遠いので、耳元で、大きな声でゆっくりと会話を交わす。

第二回　『かにむかし』

今回も、最初は「わしは耳が遠いからお役に立てんじゃろう」
と申されていたが読み始めると、まず、柿の芽がのびるところ
で、「はあ、それそれ」と目が輝き、さるが登場すると「おう、
そうじゃった、そうじゃった」とうなずかれる。作品中の「にっ
ぽんいちのきびだんご」のフレーズを、ご自分でいっしょにく
り返された。読み終わると「わしも、意外に覚えちょったねえ」
ととうれしそうに笑われた。その後、「昔のことならこんな事

も覚えちょる」とおっしゃって、子守りと畑の手伝いに明け暮れた子ども時代の話をずいぶんされた。

第三回　面接のみ

「あれからひょくひょく考えて、私も子どもの頃のことならよう思い出せるから、あんたに一代記を書いてもらえりゃあええと思うんじゃが、どうじゃろうねえ」と、はにかんだように笑っていわれる。前回の読みきかせで、ご自分の記憶がよみがえることが、よほど嬉しく印象的であったらしい。そしてその興奮が、持続されていることがわかる。

第四回　『占い鳥』

風邪で体調が悪い様子。「声が出にくいし、しゃべるとせきつくんで、すまんねえ」とおっしゃり、ベッドに横になって話をきかれる。最後まで熱心に絵本をみておられたが、ご自分では「この前は調子よくいったのにねえ」と、なにか物足りない様子。K・Tさんには、自分がある程度積極的に読みに参加する快感が大事な様子。

第五回　外泊中

第六回　『ねずみのすもう』

「声が出ん。今日は特別調子が悪うて、あんたに迷惑かけるねえ」と恐縮されながらも、絵本に興味を抱かれる。第七場面の、やせねずみが大きなもちをほおばるシーン

――その、ばん、ねずみは　うんと　もち　くった。

に、思わず「あはっ、はっ、はっ」と笑われる。

続く第十一場面の、おばあさんが綿入れを縫い直して作った、ねずみのためのまわしの絵をみて、また、「こりゃええ」と笑われる。

第七回　『おだんごころころ』

K・Tさんの一番ききやすい形で絵本を読めないだろうかと考え、思いきって、ベッドに並んで横になり、良くきこえる方の左の耳の方へ少し顔を傾けて読んでみる。これは、とてもうまくいった。

作品のことばのリズムのよさに、うまくついてこられ、「ほほう、えらいことじゃねえ。」「ははあ、おじぞうさんにあげなさいっちゅうことじゃったんじゃねえ。」と、読みの途中に、ことばを話される。

読後、「ありがとう、ご苦労さんじゃったねえ。ええ気もちじゃった。おもしろい本じゃね。子どもは読んでやったら喜ぼうねえ」といわれる。

第八回　『こんこんさまにさしあげそうろう』

顔をみると、すっと、からだをずらし、ベッドの横をあけて下さる。抵抗なくとなりに並んで横になる。作品中の「こんこんさまにさしあげそうろう」の唱えことばを、手をあわされながら、復唱される。「声が出づらいねえ」といわれながら、それでも最後まで「こんこんさまにさしあげそうろう」をくり返される。読後、「わしはたいがい信心深うしちょったが、この話は知らざった。ありがたい」といわれる。

第九回　『ちさとじいたん』

ちさとじいたんの傍らにいる猫や犬の存在が気に入った様子。

「おうおう、こんなところでみちょるわあ、なあ」と、絵本のページを指さされる。「ゆうひ」でじいたんの耳のひげをひっぱるちさの様子に笑い声をたて、「はなつみごっこ」のちさの様子に「うまいこと考えよるなあ」と感心し、「ゆきうさぎのユンちゃん」では、「じいたんがこない」というセリフに「どうしたんじゃろうかねえ。ははあ、寒いからこんのじゃろう」と気づかい、一番最後に「ははあ、風邪をもろうとりなさったんじゃな」と納得。

第十回　『うさぎのみみはなぜながい』

うさぎの恰好に「おうおう」とほほえまれる。話の途中から「おもしろいなあ。いったいだれがこんな話を考えるんじゃろうかねえ」と、しきりに、ものがたりの作り方のおもしろさに興味をもたれる。読後、しばらく、四国での幼い頃の話をされていたが、突然、「わしの足が悪くなったのは、孫のせいじゃなくて、わしのおっちょこちょいのせいじゃったのに。孫は、申し訳ないと思うちょるんじゃろう。それで、ここへよう来んのじゃ。悪いと思うとるけえ、まだ一回しかここへよう来ん」とつぶやかれる。入院のひとつのきっかけともなった骨折のことを話されているのだとわかる。このことは、K・Tさんの心の奥にいつもある孤独感と関係があったようで、初めて話された。

十回を顧りみて

頑固・わがままという家族の申し送りがあったが、自分で自分の孤独を癒すための一つの方法ではなかったのか。絵本の物語に入っていくことも、最初はかなり抵抗感があったようだが、次第に自分の幼年時代へとかけ戻っていきながら作品を楽しまれるようになった。ご本人の性格に加え、耳が遠いというハンディが加わってコミュニケーションが難しくなっていたようだが、身体を並べあって耳元で本を読んでいる間は、とても気持ちのよい時間が流れた。

③K・Kさん／F・Yさん／F・Tさんについて

紙面の都合上、各回ごとの三人の記録は省略する。前述の二人は、読みきかせ中の印象や感想が、読後にもちこされ、時にはそれが次回にまで続くこともあった。ところが、特にK・KさんとF・Yさんの二人は、絵本を読んでいる間が全てであり、読み終わると、そのいきいきとした表情が、すとんと消えおちる。恐らく、外側から支配されない物語の時間のみが、彼らの、知らぬ間に奪いとられていた人間としての尊厳を蘇らせ得る時間だったのではないか。自分の心が動き出すのを自分の速度で確かめられる、誰にもせかされずに、笑い、愛しみ、涙を流せる。そしてそういう感情を抱いた存在であると自分のことを認め得ることが一番、今回の本読みの中で大きかったのではないか。

最初はほとんど表情の動かない、自主的な発言も一言もない、「ああ」と「いや」しかおっしゃらなかったK・Kさんが『えぞまつ』を読んでいる最中に、ぽろぽろぽろぽろ、車椅子に座ったまま涙をこぼされた。鼻水がいっしょにたれるのも気にせず涙をこぼされた。『えぞまつ』は、老いた一本のえぞまつの樹が、

倒れてゆく時、朽ちた自分の身体で、新しい小さな生命を育てるという、静かで深いテーマの絵本であった。彼の内側のことばが、生活していくための信号（合図）から、心をたくしたことばに少しずつ変わっていく様は、劇的であった。第八回めの読みきかせの後、突然「女房もあんたと、昔、同んなじようなことをいうてくれた」と、いわれた。そして十回の面接の後、しばらくぶりに絵本を持っていくと、「どねいしちょるんかと思うて、心配しちょった」といわれ、こちらが励まされた気持ちになる。F・Yさんも、失語症という診断であったが、絵本を読んでいるあいだだけは、非常にゆるやかな表情で、うなずきながら、そして本人も気づかぬうちに、絵本のことばをくり返しておられた。彼女に対しては、日常のことばかけについても同じことがいえると思うが、外側からひっぱり出そうとすると頑なに内に閉じこもってしまうようだが、ゆったりと解放される物語の時間の中では自らのことばが、外へ向かって自然にこぼれ出るのかもしれない。特に、場面ごとの最後のセリフを例えば、「したそうな」であれば、「たーそーな」、「ついてきた」なら、「てーきた」という風にくり返される。第四回めの面接の時に、もっと伝えられたいことがあるのでは、と思い文字板を持参する。ところが、この『白い鳥』を読みながら、途中で、私の左手の上にマヒのないご自分の左手を重ね、ストーリーにそって指先で、トントン、と打ったり、ぎゅうっと力を入れたりなさる。それが、ことばを越えたことばとして、私に直に伝わってきた。文字板は使わず、五回め以降、ずっとこの指での会話を大切にしていった。

K・Kさん、F・Yさんとの読みきかせを通して、読書療法の主なる目的にあげられている、自己洞察を経て問題解決の糸口を見出すというような、その後につながる展望がなくても、その時間、その瞬間、人間として今、ここに在るという実感を呼びおこすことができれば、ひとつの大きな目標が達せられるのではないかと考える。実際、読みきかせが終わった後で、感想をききだそうとするような外側の動きには全く無関心、或いは、読み終わるとストーリーはすっかり忘れてしまうようであるが、読んでいる最中の心の動きは本当に活き活きとしていたのであるから。

最後に自宅療養中のF・Tさんであるが、長いあいだ一人暮らしの中で自立した精神を保たれてきたが、透析治療が始まってからの得体の知れない〝時間〟への恐怖を、絵本を読みながら、少しずつ語られた。「死ぬことは別に恐くも何ともないが、生きているという実感の少ない〝今日〟という日が不安になる」といわれたのが印象的であった。絵本のものがたりに、ご自身の人生観を重ねての積極的な発言も多くみられた。例えば『石のししのものがたり』を読みながら、兄と弟の争いに母親が心をくだき、弟といっしょに家を出る場面で、「やっぱりねえ。どこの家たて、あねえになるんじゃねえ。」という。風に。『白い鳥』のラストシーンで、長者の屋敷はつぶれても、庶民の救済が「ああ、そうそう、長者さまの　いえの　五百人のめしつかいたちは、きえた　たんぼを　みおろす　山を　きりひらい

て、　のーんびりと　くらしたそうな。」という比較的消極的な形でしか表わされていないのが納得できなかった様子で、「これじゃあ、むちで打ちすえられた血の悲しみは、どうも消えんように思うけどなあ」と、首をひねられていた。彼女の場合は、絵本を読むことで、希薄になりつつあった今日という日の実在感を強めようとするようであった。これも読書療法の一つの側面かもしれない。

〈考察〉

①老人にとっての〝絵本〟

・今回の五人の方との読みあいの経験からいえることは、年齢をとり、介護者にによって世話をされる立場に立った老人達にとって「～しましょう」「～してください」という〝優しい命令形〟以外のコミュニケーションが、極めて少ないのが現実であるということ。そして絵本を読みあう時間は、指示されない、急かされない貴重な〝場〟を老人たちのふところにとり戻す時間となり得た。「読みきかせ」でなく、「読みあう」ということばをあえて使うのは、その時間のあいだ、老人の側だけでなく、声を出して絵本を読む私自身の心も、安らかに解放されており、相互の癒しが成されていると実感したからだ。絵本のものがたりを共有することで、「私が私自身であり続け、あなたがあなた自身であり続ける」ことが、楽にできるようになった。読書療法を施されたのは、実は読み手の私自身だったのかもしれない。

・子どもの絵本によせる思いとはまた異質なものが、老人たちの読みの中に感じられた。これは、老人たちがなぜ昔話や民話の類を好まれるのか、という問いにも関わってくると思うが、総じて八十歳や九十歳にもなったお年寄りには、美談や英雄譚はそれほど魅力のあるものではないらしく、英雄のそばにいつもちょこんといるような生き物や、弱い者、小さい者の方を、たとえそれが臆病なやつであろうと、弱虫であろうと、気づかい、愛しむことの方が彼らの心を吸いよせるようだ。だから、大人にも人気の高い斉藤隆介の美談めいた話などが、あまりピンとこないというようなこともあったのだろう。それから、読後、絵本を手元に引き寄せ、表紙にのっている主人公の姿をながめ、なでる、という、複数の老人に共通なしぐさもみられた。ストーリーの展開にそって、その作品のテーマを受けとる、というよりは、どれもこれも愛しくて哀しい人間の営みとして、目を細めてみる傾向が強いように思われた。

・今回、子どもと読んでいる時以上に気になった、絵本の構成上の問題点があった。各自の報告の中でも少し述べたが、『おだんごころころ』の最終ページの唐突さや、『白い鳥』の最終ページでの庶民の救済のされ方、『花咲き山』の中に出てくる三コや八郎の英雄譚的エピソードのわかりにくさ、同じく『山のいのち』や『月の姫』の最終場面の、ひとつ前のページまでとのつなぎの悪さと、尻切れとんぼのような印象等々、考え直すべき部分が身受けられた。これは、昔話や民話風のものがたりがみせる、庶民の生きる力やエネルギーみたいなものが老人たち

の心を支える反面、本来口承で伝えられていたはずの昔話や民話が絵本に書き直される時に生じる重要な問題でもあろう。ページ数の制限等にも関係して、最後、場面を長くひっぱらず、鮮やかに断ち切ってしまった部分が、わかりにくさにつながったり、結末としてきちんと捉えておくべきところが、叙情性にすり換えられて、あいまいな印象を残したり、ということが生じているのだと思う。ここらあたりの再検討が今後各絵本について必要となってくるのではないか。

〈終わりに〉

子どもたちとしか絵本を読む経験のなかった私にとって、非常に貴重な経験であった。読書療法として、客観的判断となるようなテストを実施しなかったし、データーを量化した報告もとりやめたが、そうすることを決断した自分自身の中に、多くの発見があったように思う。相手が変わるということは私自身が変わる、ということであり、この関係の変化が絵本を読みあう〝場〟の中で確かに起こったということが伝えられれば、もしかしたら、それで充分なのかもしれない。

最後に調査に協力して下さり、また絵本の読みきかせを通して老人たちと接していくことに興味を持ちつづけて下さっているJ園のスタッフの皆々様に、この場を借りて深く御礼申し上げたい。

（読みきかせに用いた絵本リスト）

石のししのものがたり　大塚勇三　再話　秋野亥左牟　画　福音館　一九八四
かにむかし　文　木下順二　絵　清水崑　岩波書店　一九五九
えぞまつ　神沢利子　ぶん　吉田勝彦　え　有澤浩監修　福音館　一九八六
白い鳥　椋鳩十　ぶん　梶山俊夫　え　ポプラ社　一九七二
山のいのち　立山和平・伊勢英子　ポプラ社　一九九〇
花さき山　斉藤隆介　作　滝平二郎　絵　岩崎書店　一九八八
ねずみのすもう　樋口　淳　ぶん　二俣英五郎　え　ほるぷ出版　一九八六
おだんごころころ　大川悦生　作　伊勢英子　絵　ポプラ社　一九八〇
こんこんさまにさしあげそうろう　森はな　さく　梶山俊夫　え　ＰＨＰ　一九八二
ぽとんぽとんはなんのおと　神沢利子　さく　平山英三　え　福音館　一九八〇
ちさとじいたん　阪田寛夫　作　織茂恭子　絵　佑学社　一九八四
月の姫　おのちよ　作　冨山房　一九九三
うさぎのみみはなぜながい　北川民次　福音館　一九六二

（註）

(1)村中久子　「自己表出の契機としての絵本(1)
——入院児への読みきかせの試みから」
『α』2号、日本女子大学　一九八四、十一月

(2)高橋久子・城戸梨花　「小児病棟における読書療法の適用可能性
——絵本の読みきかせを中心にして」
『日本読書学会第31回研究大会発表資料集』
日本読書学会、一九八七、八月

(3)高橋久子　「親・子ども・子どもの本」（『子どもと本の心理学』
所収）
大日本図書、一九九一